

称号及び氏名	博士（人間科学） 伊藤 春美
学位授与の日付	平成23年3月31日
論文名	プロティノスの幸福論における観照と永遠
論文審査委員	主査 山口 義久 副査 中村 治 副査 森岡 正博

論文要旨

本論の目的は、プロティノスの幸福論における観照と永遠に焦点をあて、人間にとって善く生きるということがどのようなありかたとして捉えられているのかを考察することである。その際、「幸福について」（I 4[46]）と「幸福は時間によって増大するか」（I 5[36]）の両テキストを基本におき、プロティノスの問題意識に従って理解していくよう努める。

第I部では、プロティノスの幸福論の基本的な特徴を押さえるとともに、そこから課題と考察の手がかりを得る。

「幸福について」では、幸福な生とは、植物的な生や生きもの（動物）としての生とは意味が異なる、いわば同音異義的な生だとされる。それは完全な生であり、知性的な本性のうちにあるもので、幸福な人すなわち賢者は現実活動において完全な生をもっていると言われる。賢者の完全な生がいかなる事態であっても損なわれないのは、賢者が徳を所有し常に観照しているからだとされる。ただプロティノスは完全な生について、これまで何度も語っていると述べて、ここでは詳しい説明を行っていない。「幸福について」の論文は、プロティノス自身のそれまでの思想の総括的な意味をもっているのである。

次に「幸福は時間によって増大するか」で、プロティノスは「幸福な生は時間によって数えられるべきではなく、永遠によるのでなければならない」と語る。この永遠は、プラトンの『ティマイオス』の宇宙論で語られる永遠と同様のものであり、時間の永続という意味での永遠ではなく、時間の原型となるようなものである。そしてこの論文においても、幸福は徳や魂にかかわり、魂の現実活動であるということが言われている。

以上の幸福に関するテキストからみえてきたことは、幸福論はプロティノスの哲学全体との関係でみていかなければならないということ、またそのなかでも特に手がかりとすべきことは賢者の徳や観照あるいは現実活動、そして永遠であるということである。

しかしこれまでの先行研究においては、この最も重要な点が十分に取り扱われていなかった。幸福に関する論文を扱いながらも、幸福とは何かという議論よりも、意識や賢者の位置づけといった個別の問題に関心が集中したり、賢者の実践的な面をいかにして現代の倫理学に適合可能なものとして解釈するかといったことに努力が向けられていた。

これまでの研究が、プロティノスの幸福論そのものへの接近に成功していないのは、プロティノスの幸福論解釈に当たって、形而上学的議論を避け、彼の問題意識に従って議論していないからだと考えられる。

そこでプロティノスの基本的な形而上学体系と永遠に関する思想を概観する。世界には、一者（善）、知性、魂という一から多への展開と、魂から知性を通して一者へ回帰するという絶えることのない往還の流れがあり、この三つの根本原理の関係は時間的なものではなく、永遠的な存在の因果的な序列である。根源的な一者は善でありその本性は美であるとも言われる。感覚界は知性界を映し出す影像のようなありかたで存在している。

この基本的な体系に「永遠と時間について」(Ⅲ7[45])で述べられている、知性界の生命である永遠と、魂の動きのうちにおける生命としての時間という視野を加えるならば、そこには、一者、知性、魂という永遠的な縦軸の序列に対して、横軸としての時間の流れが捉えられる。この二つの方向性をもちながら一体的に展開するのがプロティノスの世界観のダイナミズムである。プロティノスの幸福論は、このような世界把握を背景において理解されなければならない。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で概観したプロティノスの幸福についての議論と形而上学的世界観が、どのような哲学的土壌のもとで形成されてきたのかを考察する。

パルメニデスの「あるもの」についての議論は、プラトンのイデア論や永遠論に大きな影響を与えている。とくに『ティマイオス』の宇宙創成論におけるモデルのありかたは、パルメニデスの「あるもの」と深い親近性をもつ。

『ティマイオス』では、イデア界と感覚界の対比が永遠と時間に対応させられている。イデア界が時間を超越しているという視点に注目して『饗宴』を読むことによって、美のイデアの観照を通じて得られる不死性は、イデア界の永遠性を示唆しているとみなすことができる。プラトンは美のイデアの観照によって不死となり善を得ることを幸福に結び付け、その段階に至るためには神から与えられた魂の知性的な部分を用いるのだと述べているのである。

アリストテレスは、プラトンよりも明瞭な形で観照を幸福と関係づけている。『ニコマコス倫理学』でアリストテレスは、観照を知性の現実活動と述べ、現実活動が人間の究極目的、神にも似るような最善の生としての幸福であると主張している。アリストテレスの知性は、実践的な知恵や論証にかかわる知識といった、あらゆる知性的営みの根本にある知である。

知性を人間のうちの神的なものとして捉え、そこに人間の幸福の最高のものがある点で、プラトン、アリストテレス、プロティノスは同一線上にある。

またプロティノスの賢者の生に関しては、ストア派との共通性も指摘されている。しかし両者の間には、永遠の捉え方や世界観において根本的な相違がみられる。プロティノスの場合、倫理的な側面においても、形而上学は付加的に捉えられてはならず、むしろ形而上学から倫理思想を理解していかなければならないということがストア派との対比によって明らかとなる。

以上のことから、プロティノスが「幸福について」で、幸福な生を植物的な生や生きものの生と区別していたことは、プラトンやアリストテレスの、知性的な魂の生を前提としたものであり、またプロティノスの幸福論において重要な役割を果たす現実活動や観照は、

知性的な魂の働きを意味していたということも理解することができる。幸福な生は永遠に基づくというプロティノスの主張も、プラトンの宇宙観とイデアの永遠性に合致するものとしてみることができる。

第Ⅲ部では、以上の考察をふまえ、プロティノスの幸福論を形而上学的視点から解釈していく。

まず幸福はプロティノスの究極目的と言われる一者との合一なのか、という予備的考察を行う。その結果、合一に関する記述と幸福に関する記述の内容とは一致せず、合一は一種の体験と考えられた。幸福に関する論文で重要視されていたことはむしろ、徳の所有と魂の現実活動である。

徳はカタルシス（浄化）であり、カタルシスの結果、知性へ向きを変えてしまっている魂に生じるのが観照であるとされる。観照は、人間の知覚や思考を可能にさせている、時間的なプロセスのうちにはない働きと考えられる。

ただ「永遠と時間について」では、時間は魂の動きのうちにおける生命ということが述べられ、「魂の諸問題について第二篇」（IV4[28]）では、魂は永遠的だと言われている。この両論文の食い違いを検討し明らかとなることは、魂の動とは「動かす」という能動的な能力を意味し、時間的と言われるのは、感覚界に向かう働きに従事しているということである。したがって、魂そのものは時間のうちにはないと考えられる。そして魂は知性界へ向かって働く側面では観照しているのであり、それが魂の永遠的な側面としての現実活動であると理解される。

現実活動はアリストテレスの概念である。アリストテレスの語る現実活動を動との対比から考察してみると、そこには根本的な世界の捉え方の違いがみえてくる。すなわち、動は時間空間のうちで物が動くという、物を主体として捉えている視点であり、現実活動は魂の能力の行使という、魂を主体として捉えた視点の区別である。この区別はプラトンの時間と永遠の対比に対応しているとみることができる。

プロティノスにおいては、アリストテレスが物の動と魂の動の違いを明確にしていなかったのに対して、その対比をより厳密化させている。魂の動は現実活動と同一視される一方、感覚界の動きは量的なものとして捉えられる。プロティノスにとって現実活動とは、まさに魂が主体となった完全な生を意味しているのである。

幸福であるためには、単に生きているのではなく、自己が純粋な魂となって実在に基づく生命として現実活動しているのでなければならず、これは魂の本来性の回復を意味している。善く生きるという場合のその生の意味するところは、時間的なプロセスをもつ物が主体の生から転向して、完全に自分自身が主体となって生きるということである。この物から魂への転向が、徳としてのカタルシスである。カタルシスによって観照の段階に至った魂は、時間的なものから離れて永遠のうちにある。

プロティノスは、永遠に基づく生に至るために美の観照を勧める。美の観照は、美しいものに感動する自身の魂に目を向けることによって可能となるものである。そして美の観照に至ることができるならば、知性の思惟と同一のものとなり、その先に善がいつでも現れているを知ることができるのである。賢者には常に善が現れているがゆえに、善き生をもち、幸福な人として生きているということが言えるのである。

以上のことから、カタルシスは時間的なものから永遠的なものへの転向を含意し、観照は永遠的な働きであって魂の現実活動であり、現実活動は魂が主体となった完全な生であるということが明らかにされた。知性に至るならば善は常に現前するものとなっているのである。ここで一貫して示されているのは、物が主体の生から魂が主体の生への向け変えの勧めである。

善く生きるとは、このような生の転向に基づく魂の永遠的なありかたであって、これが幸福な生である。プロティノスの観照の幸福論は、生において根本的に異なる自己の存在の気付きをもたらすという点で意義深いものである。

学位論文審査結果の要旨

本論文の研究対象であるプロティノスは、新プラトン主義と神秘主義という二つの形容で特徴づけられることが多いが、プラトン哲学の伝統を中心とする古代思想の集大成と、その後の西洋思想史にあたえた影響の大きさという両面において、きわめて重要な哲学者である。本論文はプロティノスの幸福論を、実践との関わりにおいてではなく、その形而上学との関係から理解しようとするものである。

以下、人間社会学研究科人間科学専攻における博士論文の審査基準に従って審査委員会の所見を述べることにする。

1) 研究テーマが絞り込まれている

本論文が扱うテーマは、プロティノスの幸福論を、彼の哲学における別の重要な概念、すなわち観照と永遠との関係を通じて明らかにしようというものであり、本論文は一貫してそのテーマに取り組んでいる。プロティノスの思想は、プラトン哲学の影響を受けているだけでなく、プラトン主義と親和性の高い他の哲学の思想的伝統を踏まえて形作られているため、本論文もそれらの影響についての考察に紙幅を割いているが、それはすべて中心テーマの考察に収斂していることが認められる。

2) 論文の方法論が明確である

本研究の対象は歴史上の哲学思想であるため、研究方法としては文献学的なやり方をとっている。すなわち、プロティノスや先行哲学者たちの原典（一次文献）の読解を基礎として、さらに現代の先行研究（二次文献）を渉猟することによって進められた。古代哲学の研究全体の傾向としても、二次資料に準拠した問題追究が多数を占める中で、一次資料から問題を抽出し、一次資料にもとづいて解決を探る研究方法の方法論的な意義は高いと認められる。

3) 研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている

第1部では、研究テーマに最も関わりの深いテキストにもとづいて、考察すべき問題と

考察法について明確にした上で、先行研究がその問題をどの程度解明しているかを二次文献の周到な踏査を通じて検討し、いまだ十分な研究がなされていないことを明らかにした。さらに問題考察の各局面でも、その都度関連する先行研究を批判したり、応用したりしながら研究を進めていることが認められる。

4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している

本研究はプロティノス、および彼に大きな影響をあたえたと考えられている哲学者たちの原典を読み解きながら、さらに現代における諸解釈を広く検討することを通じて進められた。とくにプロティノスのテキストの読解については、多くの研究者が難渋するところであるが、問題の解明に必要な箇所を丹念に読み解きつつ考察していることが認められる。

5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している

本研究の中心テーマそのものが、従来の研究がなおざりにしてきた、あるいは避けてきた問題に真正面から取り組むことであり、研究方法そのものはオーソドックスでありながら、研究内容は全体として独創的な新しい知見である。各論的な問題についても、プラトン『饗宴』における美のアイデアの観照が『ティマイオス』を先取りした無時間的永遠性の思想の表現であり、プロティノスの幸福論を用意するものであることの指摘や、プロティノスにおける一者との合一は幸福論における目的とはならないことの指摘など、独創的な新しい知見があると認められる。

6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている

本研究は、プロティノスの幸福観を理解するために、幸福な者の典型としての賢者を特徴づける徳がカタルシス（浄化）とされることに着目し、これと永遠の関係、永遠と観照の関係を明らかにすることを通じて、幸福な生のあり方を描き出す。すなわち、カタルシスは時間的な生から無時間的・永遠的な知性の生への転向を意味し、魂の現実活動としての観照はアイデア的な実在に基づく永遠的な生命としての知性の思惟への一致であることを示している。さらにプラトンの場合と同様に美の観照が重要な役割を担っていることも指摘することによって、プロティノスの思想を歴史的な脈絡からも理解可能なものとしている。この論理構成は、複合的・多層的なものであるが、永遠性を全体をまとめる要とすることによって、説得的な論理性が確保されているのが認められる。

7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である

プロティノスの倫理思想についての研究状況が、その実践論的な意義の探究に偏っている現状に鑑みて、その倫理思想の研究においても、プロティノスの形而上学を踏まえた全体的理解にもとづくべきであるということを、実際の研究を通じて明らかにしたことは、十分独創的で意義深い成果であり、将来的にプロティノス研究の発展に寄与する可能性は高いと認められる。

以上の評価を踏まえて、本審査委員会は本論文を博士の学位に値するものと判断した。